
鏡

小日向ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡

【Nコード】

N8396K

【作者名】

小日向ひなた

【あらすじ】

人の心の声が聞こえる不思議な鏡を手に入れた、貧乏な大学生の弘美。恋人の為に綺麗になりたい。その想いが高じ、どんどん綺麗になっていく。とうとう、モデルのチャンスまで手に入れたが、その代償は大きかった。自分の欲求を手に入れ、高慢に成っていく人間の变化を描いています。

プロローグ

弘美がそれに出会ったのは、6月のアジサイが綺麗な雨の日だった。

大学の帰りに、いつもの様に、バイトまでの時間潰しのつもりで、フラフラといろいろな店を見て歩いていた。そんな時に、出会ったのだ。

古めかしい感じの店。

決して綺麗とは言えない、商品の並び。

引き寄せられるように店に入った。

店の中は暗く、不健康な感じを抱かせる。

大きな姿見が、店の中を写しだしている。

弘美は、姿見の前で足を止めた。

鏡の周りには、手の込んだ彫刻がしてある。一目見て、高価な事が分かる。

しかし、残念な事に、鏡自体は歪み、映している全てが色あせて見える。

その鏡に自分の姿を映して見る。

膝下までの茶色のスカート、洗いざらしたブラウス、色あせたカーディガン。

貧乏学生を絵に描いたような姿だ。

長身で、スマートなスタイル、長い髪をもつてしても、着ている物が質素なため、光り輝く美しさを感じられない。

弘美は、ため息をついた。

どんなにバイトしても、節約しても、洋服一枚購入する事が出来ない。

親の仕送りもあるが、無理をして大学へ入れてくれているのだから、これ以上の我慢が言えるはずが無いのだ。

（もう少し、時給がよければな・・・）

鏡の中の弘美が情け無さそうに頷いた。

「何か気に入ったものは、見つかりましたか？」

いつの間にか、傍に人が居た。

弘美は驚いて振り返った。振り返って、相手を見てみると、年の頃は30半ばの美しい女性が立っていた。

「ごめんなさい。鏡を見てため息をついていたみたいだから、声を掛け辛かったです。」

女性はニツコリと微笑んで、続けた。

「気に入ったものは、ありましたか？」

「いえ、ちよつと見てるだけなので……」

お金も無いのに、店の中に入って、勝手に自分の姿を鏡に映している事が、恥ずかしかった。

すぐにでも、出て行きたかったが、どうした訳か、足が動く事を拒んだ。

「そうですか。ゆっくり、見て行って下さいね。いろいろな物があるから、見てくれるだけで、みんな喜ぶわ。」

「みんな、喜ぶ？」

「ああ、可笑しなことを言うと思ったのね。」

女性は、明るく笑った。

店の雰囲気とはまるで違う、明るい笑顔だ。

「無造作に並べてあるように見えて、どれも皆、ちゃんと自分達の事を主張してるのよ。」

「……」

「その鏡だって、貴方が見てくれて喜んでるわ。」

女性にそう言われると、不思議とそんな気がしてくる。

弘美は店内をぐるっと見回した。

どれも埃を被ってしまったって、自分を主張しているとは思えないが、確かに喜んでいる様に見える。

女性の笑顔が、弘美を不思議な世界へと誘っているのか、徐々に気持ちいが和んでくる。

しばらく、女性の話を聞いていた。

彼女の不思議な、品物たちへの想いを聞いていたのだ。
その話の中、彼女は一つのコンパクトを手にした。

「この子はね、人の心が読めるのよ。」

悪戯そうに笑う。

「だから、恋愛だつて成就する。」

「・・・・・・！」

脳裏に浮かぶ、恋人の顔。

いつも、思っていた。

本当に自分で良いのだろうか？

彼は、こんな自分のどこが良いのだろうか？

本当は、単なる遊び？

どんなに、言葉で「愛している」といわれても不安を消す事が出来ない。

自分に自信を持てない弘美は、常にそんな不安と向き合っていた。

（彼の気持ちがかかったら、どんなに幸せだろう。）

（不安を感じることが無くなるんだ。）

「その話、本当ですか？」

あるはずの無い話。

それなのに、弘美の口からは中学生の様な質問が飛び出していた。

彼女は笑ってこう言った。

「さあ？ 私は、この子の持ち主に成った事が無いから、分からないわ。」

いや、単に気を引くためのトークだ。

女性なら、誰だって、気になる人の一人や二人居るものだ。

その人の心が分かり、恋愛が成就すると言われたら、つい購入したくなる。

そんな事は、良く分かっていた。

分かっていたのだが、差し出されたコンパクトを手にしていた。
手にすると、不思議と落ち着いた。

バラの装飾が施され、ある程度の重みがある。

開くと、綺麗な輝きを放つ鏡が、ニツコリと微笑んだように感じた。

「いくら……ですか？」

きつと、高いだろう。

高ければ、買う事は出来ない。

いや、安くてもムリだ。

分かっていながら、聞かずにはいられない気がした。

「そうね、その子も貴方を気に入ったみたいだから……」

弘美の手が震えた。

（本当に安かったら……！）

「本当は、凄く価値の高いものなんだけど。……そうね、3000円でいいわ。」

3000円。

それすら、安い。

そのお金があつたら、6日間食べる事が出来るのだ。

「綺麗なバラでしょう。昔は、貴婦人が持っていたという話よ。だから、本当なら、もう一つ0を付けたいところだけど。学生さんには、無理なものね。」

「……ええ……」

鏡が、しっくりと手に馴染む。

（もつと、節約すれば……）

次の瞬間、自分でも驚くような決断を下していた。

「頂きます！」

「はい、ありがとうございます。」

すっかり、女性の手管に乗ったような気もしたが、それでも良いような気がしていた。

例え、彼の気持ちが変わらないままであろうと、恋愛が上手くいかなかったとしても、鏡が全てを癒してくれる。そんな錯覚が弘美を支配していた。

鏡を小さな無地の袋に入れ、女性に渡された。

弘美は、しっかりと受け取ると、店からでた。

振り返り、店を見上げた。

やはり、古びた汚らしい佇まいがそこにあるだけだった。

プロローグ（後書き）

自分の容姿に自信が無い弘美が、この先どのように変化していくか、お楽しみください。では、続きは又。。。。

第一話

バイトが終わり、アパートに辿り着くと、へとへとに疲れ果てていた。

予習もしなければならない。

レポートも書かなければ……。

そう思いながら、バックから、購入した小さな袋を取り出した。袋には、店の名前も、何も書かれていない。

一体、自分は何という店で、買い物をしたのか。

それすら覚えていない。

しかし、確かに弘美の手にバラの装飾の鏡があるのだ。

鏡は、「早く開いて、私を見て！」と語りかけているように思えた。ゆっくりと、コンパクトを開くと、輝きを放つ鏡が姿を現した。

しかし、その鏡に映る自分は、何と貧相なのだろう。

口紅一つ、チーク一つ点けていない。

それどころか、疲れ果て、まともな食事を取っていない為か、血色も悪い。

「貴方のおかげで、しばらくは一日一食の生活だわ。」

弘美は鏡に笑い掛けた。

「でも、後悔はしてないのよ。私は、貴方を気に入ったんだから。」「鏡が微笑んだ。

不思議な事に、店の女性が言った言葉が、妙に理解できた。

『この子も、貴方が気に入ったみたい。』

（そうだ、この子は私が好きなんだ！）

満足感が体中を駆け巡る。

久しく、こんな気分を味わった事が無かった。

いつでも、節約を心がけ、お金の掛かる事は一切やらないように気を付け、大学へ行く以外は、バイトに勢を出した。

その為、生きているというより、息をしているという毎日だ。

どうして、こうまでして、大学へ行く必要があるのか、分からなくなる事も多い毎日。

友達、親からの仕送りが多いのか、バイトをしているとはいえ、弘美ほどではない。

まして、家から通学の子は、学生生活をエンジョイしている。

生来、大人しい方で、穏やかな性格のため、人間関係で苦労したことは無い。

それでも、皆がカラオケに行く、ファミレスに行くと言っても、同行することが出来ず、寂しい思いをしているのは事実だった。

それらの想いが、鏡を手に入れた事で、飛んで行くような気がした。全てが、これで好転するような、可笑しな幸福感に満たされていた。

翌朝、目が覚めると、梅雨の晴れ間なのか、太陽が眩しかった。

大学へ行くための準備をし、鏡を覗く。

覗き込んでいるうちに、久しく付けていない、口紅を点けてみようかという気分になった。

いつも、慌しく出かけるため、洗顔するのがやっとの状態なのだ。

それが、口紅だけでも、付けて見ようという気持ちになったのが、驚きだった。

一体、自分はどうしたのか？

そつと紅を注す。

口紅を付けた顔を鏡に映す。

何だか、照れくさい様な、嬉しいような、可笑しな気分だ。

こうなると、次の欲求が湧いてくる。

（化粧品を揃えたいな。）

しかし、バイト代が入ったところで、アパート代を払ったり、食費に回したりすれば、跡形も無くなるのだ。

（無理な話ね。）

鏡に向かって呟いた。

大学への道すがら、恋人の健一に出会った。

二人肩を並べながら、満開のアジサイが咲く道を歩く。
ふと、あの店の女性が言った言葉が蘇る。

『この鏡に、彼の姿を映すの。そうすれば、彼の心の声が聞こえてくるわ。勿論、彼だけではなくて、他の人でも同じよ。』

ただし、この話は、昔話だ。

単なる、女性を喜ばせる御伽噺に過ぎないだろう。

それでも、弘美はやってみたくなった。

嘘でもいい、いや、百パーセント有り得ないだろう。

有り得ないと分かっているながら、やってみたくなるのは、乙女心だ。

弘美はバックから、コンパクトを取り出し、健一に見せた。

「昨日ね、どうしても欲しくて、買っちゃったの。」

といいながら、はにかむ。

「へえ、珍しいね。それにしても、綺麗だね。」

「そうでしょ。この装飾が気に入ったのかも知れない。」

「かもって、分からないのか？」

「うん、何を気に入ったのか、未だ不明です。」

二人は笑った。

朝の光の中で、健一が眩しい。

弘美はコンパクトを開け、健一の姿を鏡に映した。

「この鏡を見て！凄く綺麗に写るのよ。歪みがないの。」

「へえ、どれどれ。」

健一が、鏡を手に取り、顔を映す。

（こんな物が欲しいなんて、弘美も女の子なんだな。）

頭の中に、健一の声が響いてきた。

驚きながらも、健一に悟られないように、俯く。

（可愛いなあ。やっぱり、弘美を彼女にして正解だったな。）

パチンという音が聞こえ、弘美の前にコンパクトが差し出された。

弘美はコンパクトを受け取りながら、健一の顔を見つめていた。

「どうしたの？ 俺の顔に何か付いてる？」

健一が顔を撫でてみせる。

「うっん・・・そうじゃないの」

（そうじゃない、そうじゃないの！）

（本当に聞こえた！彼の心の声が！）

（これは、魔法の鏡・・・何てステキなの！）

（これで、不安を感じる事なんて無くなる。いつでも健一の本心を知る事が出来るんですもの。）

弘美は、大切そうにコンパクトを眺めた。

「よっぽど気に入ってるんだね。」

「ええ、そりゃあ・・・」

どんな鏡よりも素晴らしい鏡が、今弘美の手の中にあるのだ。

『恋愛成就』

店の女性が言っていた言葉が蘇る。

第一話（後書き）

お読み頂きありがとうございます。感想を書いていただけると嬉しいです。では、続きは又・・・

第二話

キャンパスに着くと、お互い講義を受ける教室が違う為、分かれなければならぬ。

今までの弘美は、それすら不安だった。

みすばらしい自分。それに比べ、周囲の女生徒は皆華やかだ。

健一が、他の女生徒に気を惹かれるのではないかと、心配でならなかった。

しかし、これからは、いつでも健一の本心を知る事が出来る。

そう思うだけで、背中に羽が生えたようだった。

講義が始まる。

けれど、どうしても思いはコンパクトへと行ってしまう。

そして、鏡に映るみすばらしい自分。

（もっと、綺麗になりたい。）

（健一にふさわしい女性になりたい。）

とはいえ、健一が高貴な家柄というわけではない、学園一の美男子というわけでもない。

弘美自身が、自分のみすばらしさを気にしての事だけなのだ。

（お化粧もしたい・・・そうしたら、もう少し綺麗になれるのに。）

周囲を見れば、皆化粧をし、アクセサリを身につけている。

自分はいえ、いつも同じような服装。

垢抜けない、田舎の少女のままだ。

ため息が出る。

いつもなら、講義に集中し、一言足りた逃すまいと聞き入っているというのに、今日の弘美には、その熱意は無かった。

唯々、思いは『綺麗になりたい』、それだけだった。

講義が終わり、周囲の友達が声を掛けてきた。

カラオケに行こうというのだ。

弘美は小さく笑うと、

「バイトだから」と断るしかなかった。

仕方が無いのだ、働かなければ、食べていけなくなる。

それでも、今月は余計なものを買ってしまったのだから。

「もつと、時給のいい所で働けば楽なのに。」

友達の一人が言う。

（そうしたくても、実際そんなバイトがないでしょ！）

心の中では、反論しながらも、そんな事は言えない。

言ったところで、親元から通い、親に全てを任せている人に何が分かるだろう。

「そうね。あればいいんだけど。」

弘美は、疲れた笑顔を見せた。

「私、探してあげるわ。お父さんの仕事柄、バイトとかつて有りそうだし。」

（だったら、自分が働けばいいのに。）

「ありがとう。その時はお願いね。」

皆、楽しそうに弘美の傍を離れ、外へと出て行った。

（貴方達には分からないわ。）

（働くってどういうことか・・・。）

カラオケ、ファミレス、映画、合コン・・・。

それらは、弘美には縁の無い世界だ。

バックを肩にぶら下げ、教室を出る。

（バイトは、6時からだから・・・。）

時計を見た時、廊下の先から呼ばれた。

さっきまで、講義をしていた加藤教授だ。

弘美は、体が硬直するのが分かった。

（不味い！今日、真面目に講義を聞いてなかった事言われるのかな。）

そんな思いが頭をよぎる。

「永友さん・・・だったね。」

「はい」

「ちよつと、時間いいかな？」

教授は、白衣のポケットに手を入れたまま話し出した。

「今、バイトする人を探してるんだけど、誰でもいいわけじゃなくてね。」

「はぁ……」

「僕の研究室で、資料の整理をしてくれるだけでいいんだ。」

「……」

「勿論、バイト代は、弾むつもりだけど、永友さんやらないかなあ。」

「

始めて、まともに話した。

今までは、遠目に見ているだけで、話をする事が無かったのだ。話掛けられてみて、話し易いのだと分かった。

「さつきも言っただけど、誰でもいいわけじゃないんだよ。」

「……資料整理ですか……」

「ああ、どうかな？」

「毎日ですか？」

「いや、週に3日でいいんだよ。午前でも、午後でも構わないんだが。そうだね、君の空いてる時間を活用して欲しいね。」

「……それなら」

それなら、バイトに支障は無い。

それに、余剰金が入れば化粧品も買えるのだ。

弘美は、今日からでもやらせて欲しいと申し出た。

教授は快く受け入れ、弘美の新しいバイトが始まった。

第二話（後書き）

お読み頂きありがとうございます。さて、女性の美への意識とは貪欲なものです。弘美は新たなバイトを始めてどうするのでしょうか。この続きは、又。。。。

第三話

バイトは、案外楽なものだった。

大量の資料を、決まったファイルに納める、それだけだったのだ。それでも、ある程度の知識がなければ、分らない事もある。

又、外部に漏洩されたくない内容もあるようだ。

そのところで、教授は弘美に白羽の矢を立てたようだった。

毎日、3〜4時間を教授の研究室で過ごす。

時には、一緒にお茶を楽しむ事もある。

勉強にもなり、バイト代も入る。弘美にとって、大変都合の良いバイトだった。

仕事に慣れる頃には、半月が過ぎ、初めてのバイト代を貰うことが出来た。

「かなり奮発したよ。」

教授は満足そうに、そう言った。

「君がこれほど頑張るとは、正直思わなかったんだけどね。最近の学生は、口は達者だが、仕事となると適当にこなす。しかし、僕は適当にこなされるのは好きじゃないんだよ。」

「適当でないとすると？」

「しつかり、だね。」

教授が笑った。

弘美も笑った。

「バイト代は2週間毎に渡すつもりだけど、それでいいかい？」

「はい！」

弘美の思いは、化粧品へと飛んでいた。

研究室を出て、人気の無さそうな場所を探す。

そこで、バイト代の封を切る。

中を覗くと、思った以上に入っていた。

気持ちが逸る。

（これで、化粧品を買おう。あまったら、アクセサリーか洋服・・・。）

（洋服までは無理ね。）
夢が膨らむ。

キャンパスを後にすると、入ったばかりのバイト代を手に、早速買い物へと向かった。

今まで、抑えてきた購買欲が目覚めたようだ。

（まずは、化粧品ね。綺麗になって、健一に喜んでもらいたいし！）
足が弾む。

デパートの化粧品コーナーで、いろいろ悩みながら、化粧品を選んだ。

この春出たばかりのカラーだと店員が勧める。

（リップは持つてるけど・・・）

それでも、新色といわれると欲しくなる。

結局、口紅も含め必要なものを揃える事にした。

その為、思った以上に金額が張り、バイト代は跡形もなく消えた。それでも弘美は満足だった。

早く、家に帰って、あの鏡に化粧した、自分の顔を映したかった。

しかし、6時から又バイトが入っている。

気持ちが急ぐが、諦めるしかない。

（楽しみは、後に取っておきましょう。）

大事そうに、化粧品が入っている袋を抱きながら、バイト先へと向かった。

足が棒になる様な4時間を過ごし、アパートへ帰りついたのは、10時を20分ほど回った頃だった。

シャワーを浴び、パジャマに着替える。

いつもなら、それから教科書を開くのだが、今日はどうしても化粧

品が気になった。

せめて、クリームだけでも塗ってから、眠りに就きたかったのだ。弘美は、コンパクトを開け、買ってきたばかりの乳液や化粧水の蓋を開けた。

ほんのりと甘い香りがする。

肌に付けると、心地良さが広がる。

顔全体に馴染ませ、鏡を覗き込む。

（もっと、綺麗になりたい。）

心の中で、鏡に向かって拝むように願った。

（きつと、毎日ちゃんとケアをすれば、綺麗になるわよね。）

友達の顔が思い浮かぶ。

どの子も、化粧をして綺麗になっている。

自分も、化粧をすれば、きつと綺麗になれると思ったかった。

（それにしても、こんなに高いとは思わなかったわ……。）

購入したばかりの化粧品達を眺めると、ため息が出た。

（もっと、時給が高かったらな。）

今までのバイトに比べたら、かなり優遇されている。

それでも、いざ買い物してみると、現実は厳しい。

欲が欲を呼ぶ。

（もっと、頑張れば、時給を上げてくれるかな。）

（それとも、所詮は学生のバイトだから……）

鏡に映る自分の顔を見つめた。

（うつん、そんな事無いわよ！もっと、私の価値が分かれば、教授だってバイト代を上げてくれるはずよ！）

（でも、どうすればいい？）

鏡をじっと、見つめているうちに、弘美はある事に気が付いた。それは……。

第三話（後書き）

お読み頂きありがとうございました。続きは又。。。。

第四話

翌日から、研究室の弘美の机の上には鏡が置かれた。

教授が部屋に入ってくると、弘美は立ち上がり、コーヒーを淹れた。研究室に、挽きたてのコーヒーの香りが充満する。

弘美は、教授の机にコーヒーを置いた。

「お、気が利くね。」

教授が一口飲む。

「ちょうどいい甘さだね。それにしても、よく私が飲みたいのが分かったね。」

「お顔を見れば分かります。」

弘美はニッコリと笑った。

「それにしても、いつもはブラックなのに、今日は砂糖がちょうど良いくらい入っているじゃないか。」

嬉しそうな教授の顔。

弘美が笑顔のまま、自分の机へと戻り、鏡に視線を投げた。

その日から、弘美は教授だけではなく、鏡に映る人の考えをそのまま行動に移した。

コピーを撮る。

資料を作成する。

電話を掛ける。

言われる前に、やってのけるのだ。

それも、当たり前障りの無いように、常に相手を気遣っているように振舞った。

鏡は、どんな相手でも、心の声を正確に弘美に伝えてくれた。

その成果は大きかった。

2週間後、教授は大喜びでバイト代を上げてくれたのだ。

勿論、それでも弘美の気持ちたちが済むほどというわけには行かない。あくまでも、バイト代のラインだ。

弘美は、とても嬉しいと教授に感謝の言葉を述べた。

バイト代を手にし、キャンパスを歩いていると健一に会った。

バイトが増えたため、健一との時間も大分少なくなってきた。それでも、弘美が声を掛ければ、嬉しそうに笑顔を向けてくれた。

「弘美、久しぶりだな。」

「ごめんね、バイトが忙しくて……。」

済まなそうに、健一を見る。

その顔は、今までの弘美とは違い、キラキラと輝いていた。

「綺麗になったね。」

「ありがとう。」

嬉しそうに弘美が返事をする。

二人は、肩を並べながら、ゆっくりとキャンパスの中を歩き出した。7月に入り、大分暑くなってきた。

弘美は、汗で化粧が落ちるのを気にしながらも、笑顔を絶やさなかった。

「お化粧するようになったんだね。」

（そうよ、健一。貴方の為に、私は綺麗になりたいくて、毎日頑張ってるのよ。）

弘美の笑顔が、そう語っている。

しかし、元来無駄な話をしない弘美は、この言葉を飲み込んだ。

（言わなくても、健一なら分かってくれるわ。）

「何だか、凄く綺麗になって、眩しいよ。」

嬉しかった。

どんな言葉よりも、健一の言葉が嬉しい。

（もっと、綺麗になりたい！ 他の誰よりも綺麗になりたい！）

弘美は、心から思ったのだった。

翌日も、バイト代を握り締め、買い物へと向かった。

前回購入できなかった、洋服を買ったためだ。

この2週間、どんな服を買おうかと、毎日いろいろな店を見て回っ

ていた。

周囲の女性を観察して、どんな服が自分に合うかと、夢想する毎日だったのだ。

店に入り、イメージに合う服を選ぶ。

（洋服を買うのが、こんなに楽しかったなんて！）

カラフルなスカートやブラウス、Ｔシャツ。

他にも、Ｇパンも欲しい。

あまったお金で、アクセサリも欲しい。

欲が膨らんでいく。

第四話（後書き）

お読み頂きありがとうございました。では、又。。。。

第五話

バイト代が入るたびに、買い物を楽しんだ。
その結果、どんどん綺麗になっっていく。

若々しく、光り輝いて。

時には、店外にパラソルを出して、席を設けているパーラーにも入れるようになった。

そこで、一人でゆつくりとアイスコーヒーを飲むのが、弘美のささやかな夢だった。

今日もバイトを終え、講義もそこそこに、店へ足を運んだ。

最近、弘美が歩けば、道行く人が振り返る。

弘美は、それも楽しくてしょうがなかった。

店外のテーブルに着き、店員の視線を感じながら、アイスコーヒーを注文する。

忘れてならないのは、必ず鏡をテーブルに置くことだ。
鏡に客の姿が映る。

《あの子、綺麗ね。》

《モデルさんなんじゃない？》

《彼氏いるのかな？声掛けてみようか。》

《あれだけの美人だ。お前には無理さ。》

いつでも、どこでもそんな声が聞こえてきて、弘美は大変満足だった。

それなのに、未だにコンビニでバイトをしている。

それが、今の自分に合わないと思っていた。始めていた。

とはいえ、もつと良いバイト、見栄えのするバイトと考えても、大学生の弘美にあるわけが無いのだ。

今は、こうして他人の心の声を聞いて、満足するしかなかった。

化粧をし、流行の服を着こなし、アクセサリーを身につける。

それが、自分をこんなに変えるものなのか。

弘美自身、驚きもあつたが、
（本当は、綺麗だったのよ！）
と、鏡を見るたびに思う。

店の前を、健一が通るのが目に入った。

しかし、健一は弘美には気が付かないようだ。

（何？ 私がここににいるのに、気が付かないの?!）

弘美は、立ち上がり「健一！」と声を掛けた。

「あ！」

小さな驚きが、健一の口から出る。

「どうしたの!? 私に気が付かないなんて、変な人ね。」

健一の顔が曇る。

そつだ、最近弘美に向ける健一の顔が良く曇るのだ。

弘美は、理由が分からなかった。

こんなに綺麗な彼女を前にして、何が不満だというのだろう。

「こつちに来て、座らない？」

誘っているようで、有無を言わせない雰囲気がある。

健一が先を急ぐといわんばかりに、前に目を向けた。

「ねえ！健一、どうしたの?! 私が、座らないかって言ってるのよ

！誰だつて、私が声を掛けたら喜ぶわ！」

健一が不愉快そうな目を弘美に向ける。

だが、その言葉に反論する事も無く、席に付いた。

「もうすぐ、秋ね。」

「そつだね。」

頬杖を付きながら、健一を見つめる。

それが、自分を寄り可愛らしく、綺麗に見せるポーズだと知っているのだ。

「凄いと思わない? 6月のアジサイが枯れて、もうコスモスが咲くわ。その間に、私はこんなに綺麗になったのよ。」

「ああ、凄いのよ。」

気の無い返事だ。

弘美は、段々と苛々してきた。

（こんな綺麗な私と居るというのに、健一は何が不満なの?!）

弘美は鏡を健一に向けた。

そつと、気づかれないように。

《弘美・・・変わったな。》

健一の声が脳に響く。

《俺の好きな、弘美じゃなくなったよ。》

弘美の顔が、歪む。

綺麗になった自分に対して、好きじゃないというのか？

《弘美と一緒にいても楽しくないしな。早く、この場を離れなくちゃ、麻美との約束に遅れる。》

何という事だろう。

綺麗になることだけに、一生懸命で、健一が他の女に気持ちを向けていたことに気が付かずになっていたのだ。

許せなかった。

これほど、綺麗に、美しくなったのに、どこが気に入らないというのだろう。

それとも、田舎娘の様な、鈍臭い女が趣味だったのか？

（冗談じゃないわ！この私が、他の女に男を取られるなんて！プライドが許さない！）

（別れたければ、別れて上げるわよ！）

（男は他にも、たくさんいるわ！）

弘美は、鏡を閉じ、手に持つと冷ややかな笑みを健一に向けた。

あくまでも自分のプライドを保つために。

「ねえ、健一。私、ずっと思っていたのよ。」

健一が顔を上げ、弘美を見据えた。

美しかった。

美しいが、そこにいる弘美は、最早健一が愛する弘美では無くなっている。

「私と健一では、釣り合いが取れないと思うのよ。だって、私はこんなに綺麗なのに、貴方はどう？全然、依然と変わらないじゃない？ダサいままなのよ。私みたいな綺麗な女性には、それ相応の男性がいると思うのよ。お金持ちで、ルックスがいけてる人がね。だから、別れましょ！」

一気に捲くし立てた。

もし、一言でも健一が何か言ったら、弘美は負けてしまうだろう。自分が美しくなったのに、どうして捨てられねばならないのか、その悔しさで涙が止まらなくなるだろう。しかし、今の自分に泣く事は許されないのだ。

男の前で泣く等、それは今の弘美には許されない失態なのだ。

美しい弘美は、誰よりも気高くなければならない。

「そうだな。」

おもむろに、健一が答えた。

その声は、どこか安堵の色を帯びていた。

健一が席を立つ前に、弘美はその場を離れなければならない。

そうしなければ、映画の場面の様に、美しい別れにはならないのだ。決して、自分が残されるなどあつてはならない。

弘美は立ち上がって、伝票を手にすると

「さよなら」

と一言残して、歩き出した。

第五話（後書き）

お読み頂きありがとうございました。感想をいただけると励みになりますので、よろしくお願いします。では、又。。。。。

第六話

夕方になり、バイト先へ向かう。
気が重い。

それでも、バイトを止めるわけにはいかないのだ。

別段、健一と別れたことが哀しいとは思っていなかった。

他の女に心を奪われた男など、興味は全く無かった。

それよりも、美しい自分がコンビニで働く事が許せなかったのだ。

薄汚い、色あせたコンビニの制服に腕を通す時に感じる屈辱感。

これほどの美しさを持っていながら、客に頭を下げなければならぬ。
い。

どんなに、理不尽な客でも笑顔を作らねばならないのだ。

最近では、弘美目当ての客が増え、店長は喜んでいるが、弘美自身は苦痛でならなかった。

お金があれば、こんなくだらないバイトをしなくても済むのに、と弘美は最近考えていた。

（もつと、高額の花やかなバイトは無いかしら。）

ため息が出る。

足を棒にして、4時間を耐えねばならない。

それでも、教授からもらうバイト代の半分にもならないのだ。
コンビニのドアが開いた。

中年の女性が入ってきた。

「いらつしやいませー。」

明るく挨拶をするが、その言葉は誰に言っているわけでもないのだ。
勿論、今入ってきた客に対しての言葉だが、弘美にはそんな気持ち
は微塵も無い。

女性客は、冷蔵庫からジュースを一本取ると、弘美の前に置いた。

バーコードを読み取らせ、金額を伝え、袋に入れる。
それだけだ。

女性はその間、じつと弘美を見つめていた。

（何、この人。人のことじつと見て、綺麗なのは知ってるわよ！）

「貴方・・・バイトしてみない？」

唐突な問いかけだった。

「ああ、ごめんなさい。私は・・・こういう者よ。」

名刺を差し出して来た。

名刺には、【モデルクラブ l a l a 代表取締役 金木 陽子】とある。

【モデル】という印字が、弘美の胸に響いた。

「貴方ほど綺麗なら、モデルにぴったりよ。ちょうど、探してたのよ。」

「はあ・・・」

（ここで、飛びついたら浅はかだと思われるわ。私は、美人なんだから、気高くしなくちゃ。）

「ね、やる気になったら、電話を頂戴！待ってるわ！」

金木陽子は、袋を取り上げると店から出て行った。

一緒にレジに並んでいた、バイト生が客が出て行くと、大声を上げた。

「凄い！今の、金木陽子でしょ！」

「あら？ 知ってるの？」

「そりゃあ、モデル業界で彼女を知らなかったら、潜りよ！」

「そうなの。」

「その金木陽子に誘われるなんて、最高の栄誉よ！」

栄誉。

（その言葉も好きだわ。）

「ね！是非、受けたら？弘美さんが、コンビニでバイトしてる方が不思議なんだから。」

（私もそう思ってるわよ。）

「楽しみね。弘美さんが、モデルになったら、みんなビックリするわ！」

（誰も驚かないわ。当たり前だもの。）

「そうなんつてもお友達でいてね。だって、モデルが友達だなんて、みんな羨ましがらわ。」

バイト生が有頂天になっている。

弘美が冷ややかに見ているとも気が付かずに。
可笑しかった。

どうして、自分がモデルになったからといって、この子が喜ぶのだから？

（これは、私の人生なのよ。あんたには関係ないわ！）

「みんなに自慢しちゃおう！」

「あんたと友達じゃないけど、わ・た・し。」

弘美の顔が、皮肉たつぷりに歪んだ。

バイト生の動きが止まり、弘美を見つめている。

「あんたと私とじゃ、格が違うのよ。間違えないで、私はモデルになれるほど美しいけど、あんたは石ころじゃない。」

可笑しかった、可笑しくてたまらなかった。

もう、自分はコンビニでバイトなどしなくても良いのだ。

美しくなるという事は、全てが変わり、人生が好転するという事なのだ、弘美は美しくなれない、

石ころの様な隣人を嘲笑った。

（私はもう、貴方達とは違う世界の人間なのよ！）

（こんなバイトとは、さよならよ！）

（それにしても、健一と別れてすぐにこんな幸運が転がり込んでくるなんて！あの人はきっと、疫病神だったのね。）

天井の蛍光灯が一つ、切れそうにチカチカと瞬いていた。

第六話（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。感想をいただけると嬉しいです。よろしく願います。では、続きは又。。。。

第七話

2日程して、名刺の番号へ電話を掛けた。

金木陽子の名を出すと、すぐに取り次いでくれた。

陽子は、弾んだ声で電話に出てきた。

「その気になってくれたのね！」

そうなるだろうと予測が立っていたのだろうが、決して相手を不快にさせない言い方だ。

弘美は、心の中を見透かされないように、注意しながら話をした。

「ええ、でも・・・まだ・・・」

喜び勇んで電話したと思われたのでは、今後が遣り辛くなる。せつかく声を掛けてくれたから、電話をしたのだという事を、匂わせるように話す。

「いいのよお。とにかく、電話をくれたのだから。じゃあ、早速だけど細かい話がしたいから。」

陽子は、どんどん話を進めていった。

その結果、その日の午後、コンビ二近くのアミレスで会う事になった。

弘美は、気持ちを抑えながら、電話を切った。

ケイタイを切り、通話を終了すると、空を仰いだ。

心は、早くもステージで蝶の様にドレスの裾を翻し、軽やかに歩く自分の姿を想像している。

（私はもう、今までの私じゃないわ！）

（さて、バイトに行くか）

弘美は、ケイタイをしまい、コンパクトを取り出した。

鏡に自分を映し、我が美を確認する、それが楽しみになっている。

誰よりも美しい自分。

決して、終わることの無い美貌。

弘美は、鏡に自分の顔を映し、化粧を直すと、研究室へと歩を進め

た。

途中、1年先輩に当たる、男子学生に出会った。

彼は、弘美を見つけると傍に来て、満面の笑みを浮かべてこう言った。

「やあ、永友さん。」

弘美は振り向き、男子学生を見つめた。

彼は、弘美に見つめられただけで、全身に鳥肌が立つのを覚えた。

「どうして、私の名前を？」

弘美とその男性とは、面識が無い。

いや、面識が無いと思っているのは、弘美だけなのかもしれない。

「いろいろとね。」

男性は、言葉を濁し

「彼氏と別れたんだって？」

（何で、そんな事をしているんだろう？）

弘美は訝しげに相手を睨んだ。

「止めてくれよ、そんな怖い顔で見ないでくれ。」

「どうして、知ってるんですか？！」

詰問調になってしまう。

「君の彼氏が友達に話したのさ、その話が俺の耳に入ったってわけ。」

「

「そう……」

人の口に戸は立てられない。

いずれは、分かる事だ。

「奴も酷いよな。二股だって言うじゃないか。」

プライドが軋んだ。

自分のような、美しい女が、二股を掛けられていた事実を、周囲が知っているのだ。

屈辱だった。

「二股？ 冗談じゃないわ、あんな貧相な奴、くれてやったのよ！」
つい、口調がきつくなる。

男は、大きく笑った。

「いいね、美人は気が強くなっちゃ！」
いかにも楽しそうな笑いだ。

しかし、弘美の方は不愉快だ。

「私、バイトがあるから、失礼します。」

そんな事を、わざわざ言いに来たのか、なんという浅はかな男だ。
弘美の心が怒りで震えそうになった時、男は言った。

「付き合ってくれないか？」

まるで、挨拶のような言い方だ。

「え？」

構内の廊下、人の姿こそ多くは無いが、恋の告白には論外のスチュ
エーションだろう。

「俺、ずっと君を見てたんだよ。でも、彼氏がいるしさ、言えない
じゃない。でも、今なら大丈夫だろ？」

「・・・・・・」

「早くしないと、他の奴に獲られちゃうからさ。」

「獲るとかって・・・・獲物みたいね。」

皮肉。

こんな皮肉は、以前の弘美なら、到底言えなかった言葉だ。

「いや、そういうつもりじゃないけどね。でも、そうかもしれない
な。」

又、大きく笑う。

健一と別れて、たった2日だ。

いや、今の弘美なら2日も恋人がいない方が不思議かもしれない。

「だから、付き合って欲しい。ずっと、好きだったんだ。」

男が真剣に言う。

これだけは、冗談じゃないと言う気持ちだが、そうさせているのだろ
う。

弘美は、相手のルックスに注目した。

前髪を長く垂らし、栗色に染め、ピアスをしているが、顔立ちはい

い方だろう。

着ている物も、なかなかのセンスだ。
自分のアクセサリーとしては、合格とは言わないが、とりあえずキープしておいてもいいかも知れない。

「いいわ。」

弘美が、承諾すると相手は大喜びし、体中で、その喜びを表現した。
しかし、その姿が子供のようで、弘美には面白くなかった。

（落ち着かない人ね！）

「俺、戸田 勇。宜しく！」

「私の名前は知ってるわよね。」

「知ってるよ、弘美。」

（最初から呼び捨て?!）

「そう、じゃあ、バイトだから。」

「あ！メアドと携番、交換しようよ。」

と、ケイタイを出してきた。

面倒だという思いが先にたつが、一応付き合うのだから仕方が無いだろうと、ケイタイを出した。

お互いの番号を教えあい、登録する。

勇は、大事そうにケイタイをポケットにしまった。

「じゃあ、バイトだから。」

と、歩き出すが、勇が着いて来る。

「まだ、何か御用？」

「恋人同士なんだから、傍にいたいと思っても、可笑しくないだろう？」

「私は忙しいのよ。」

「本当に綺麗だなあ。」

勇は、弘美の話を聞いていないのか、どんなに冷たい言い方をされても、頓着しないようだ。

（面倒な人ね！）

「バイトが終わったら、連絡くれよ。デートしよう。」

「バイトが終わったらず定が入ってるわ。」

顔を真つ直ぐ、前に向けたまま答えた。

「友達に紹介したいんだけどな。」

「紹介？自慢したいんでしょ？」

「うん、そうだな。どちらかというと、自慢だな。弘美をとつとつ
ゲットできたという、自慢だな。」

そして、又笑う。

（ちつとも、可笑しくないわよ。）

「とにかく、今日はダメだわ。」

「明日は？」

「分からないわ。」

「じゃあ、メールするよ。」

「・・・・・・」

研究室の前に着いた。

弘美は、何も言わずにドアの中に入って行った。

第七話（後書き）

お読み頂きありがとうございます。感想をいただけると、参考になりますので、よろしくお願いいたします。では、続きは又。。。。

第八話

午後になり、待ち合わせの場所へと急ぐ。

（ファミレスなんて、私にはふさわしくないんだけど・・・しょうがないわね。）

ドアを押し、店内へ入り歩き出すと、お客の間からさざ波のようなざわめきが起こる。

《綺麗な子ね》

《モデルさんかしら》

《美人だなあ》

等のひそひそ声が聞こえてくる。

しかし、そんな事には慣れっこになりすぎている弘美は、微笑を称えながら店員に待ち合わせである旨を伝えた。

陽子は、その一部始終を、店内奥のテーブルで見っていた。店員が、

「あちらの方でしょうか？」

とテーブルを示す。弘美は、小さく頷き歩き出す。

モデルへの一步を確実にものにすべく。

美しく、清楚な身のこなし。

誰もが、近寄りがたいような美の雰囲気。

弘美は、美に対しての、全てを兼ね備えるためなら、努力を惜しまなかった。

そして、その努力が今、陽子によって開かれようとしているのだ。

陽子のテーブルに着くと、挨拶を交わした。

陽子は満足そうに、弘美を見て笑った。

その笑顔は、（私の目に狂いはない！）という、自信に満ちて見えた。

「本当に綺麗ね。貴方は、自分の美しさをご存知なのかしら？」

愚問だ。

これだけの視線を集められるのは、弘美を置いて他にいないという事を、彼女自身良く分かっているのだから。

「いいえ、綺麗だなんて、とんでもありません。」

良く分かっている、知っていると云ったのでは、高慢な女と思われるしまう。

弘美は、プライドを折りたたんで仕舞いこんだ。

「そう、貴方は本当に綺麗よ。今だって、店内の誰もが貴方を見ていたわ。」

「そうでしょうか？」

「貴方は、モデルになる為に生まれてきたような人ね。」

果たして、以前の弘美を見ても、同じ事を言われただろうか。

いや、そんな事はない。

美を手に入れたからこそ、全てが好転しているのだ。

店員が、水とメニューを持ってテーブルに来た。

弘美は、自分に一番ふさわしい物として、アイスコーヒーを注文した。

陽子は、弘美が注文する言葉や、仕草の全てを観察していた。

そして、しばらく弘美の大学の話や住んでいるアパート等の話を聞き、やっと本題に入った。

「学生さんだから、本業って訳には行かないわね。まずは、バイトで・・・その為には、ちゃんとレッスンを受けて欲しいけど、できる？」

「レッスン・・・ですか？」

考えてもいなかった。

モデルになるのに、レッスンが必要だとは・・・。

「綺麗というだけで、ステージを歩けるものではないのよ。そういう、プロダクションもない事は無いわね。でも、うちの会社は、そういうのはやらないの。モデルとして活躍してもらうためには、歩き方やターンの仕方など、いろいろと覚えてもらう事があるわ。出

来るかしら？」

ここで、出来ますといってしまうのは簡単な事だ。

しかし、あくまでも謙虚である事の方が大事な気がした。

「一生懸命頑張ります。」

そして、微笑。

ちよつと、小首をかしげて、自分が一番可愛らしく、より美しく見える角度。

「そう、じゃあ・・・いつから、出来るかしら？」

今すぐでも良かった。

いや、逆にすぐに始めたいほどだった。

「そうですね・・・そちらのご都合の宜しい時から、お願いします。」

陽子が、弘美を見つめる。

「貴方は聡明ね。」

陽子の賛辞が心地良く、弘美の耳に響く。

陽子の機嫌を損ねない事、陽子のお気に入りになる事、それが、モデルとして一番の近道だと、弘美は感じ取っていたのだ。

そして、その計画通り、陽子は弘美を気に入っていた。

「そうね・・・。」

陽子がシステム手帳を開き、

「明日から、レッスンを開始しましょう。早く仕事が出来る様に、スタートも速いほうがいいわ。」

「はい。」

「貴方の事だから、1ヶ月も立たずに、仕事に出る事が出来ると思うわ。」

「はい、頑張ります。」

陽子は手帳を閉じながら、笑顔で伝票を掴んだ。

「あ、自分の分は・・・。」

自分で払います。という言葉を口にするジェスチャーを示す。

勿論、そんな気は毛頭無い。

自分が支払いをするのは、一人で行動している時だけだ。

それ以外は、連れの者が、自分の為にお金を使うのは当たり前なのだ。

それが、美の特権なのだから。

陽子は、手で制して

「貴方は、大事なモデルさんよ。このくらい、気にしないでいいわ。」

「そういうと、明日待っているからと、陽子はテーブルを離れていった。」

弘美は、コンパクトを開き、自分の顔を鏡に映した。

化粧は崩れていない。

いつも通り、美しいままだ。

鏡も喜んでるように感じる。

（私が美しくなるたびに、この子は喜んでくれるのね。）
変な感覚だが、弘美はそう感じていた。

鏡が、弘美を映すたびに笑っているように……。

第八話（後書き）

お読み頂きありがとうございます。感想をいただけると励みになりますので、よろしくお願いします。では、続きは又。。。。

第九話

翌日から、午前中にバイトをして、午後はレッスンをすることになった。

講義を受けている暇が無くなってきていた。

それでも、実際モデルとして活躍できるようになれば、それなりに講義にも出られる様になると考えていた。そうなれば、研究室のバイトも止めたところで、それなりの収入も入ってくる。

今は時間的に厳しいところもあるが、それでも講義と研究室のバイトとコンビ二を掛け持ちしていた頃に比べたら、雲泥の差で幸せだった。

満たされた毎日が夢のように過ぎて行く。

歩き方や立ち居振る舞いも変わってきている。

それは、レッスンの賜物だった。

歩き方にしても、ターンの仕方にしても、笑顔、視線、誰もが苦戦しながら覚えていく事を、弘美は短期間で体得していった。

モデルの講師も、これほど覚えが早い人は珍しいと賛辞を惜しまなかった。

毎日が最高の気分だった。

モデルの世界に携わっている人の賛辞は、弘美を更に有頂天にした。最早、自分がモデル界の一員として認めてもらっているかのような錯覚を覚える。

レッスンを開始して、10日ほど経つと友人間でも、弘美の行動が噂になりだした。

久しぶりに講義に出た弘美の周りには、友人達が集まり騒ぎ出した。弘美は、友人達が鏡に映るように、見ていた鏡を机の上に置いた。一人が言う。

「弘美、最近モデルクラブに通ってるでしょ。」

周囲の賛辞が飛ぶ。

「弘美ほど、綺麗なら当たり前よね。」

「どうやって、モデルクラブに入ったの？」

「紹介とか？」

「ハンティグされたとか？」

誰もが興味深深に、弘美の話を聞きたがった。

しかし、弘美の脳に聞こえてくる彼女達の声は違っていた。

《あんなに、田舎者だったのに、あんたに出来るわけ無いじゃない！》

《あんたが出来る位なら、私に出来ないはず無いのよ》

《ちよつと、綺麗になったからって、何がモデルよ！》

そう、それが彼女達の本心なのだ。

妬み、嫉み。

弘美は、可笑しかった。

人の心の声が聞こえてくるというのが、これほど可笑しい事だとは思わなかったのだ。

人間とは、何と愚かな者だろうと思うと、可笑しくて仕方が無い。

大体が、自分よりも綺麗な人がこの中にいるだろうか？

誰に聞いても、いるはずが無いのだ。

そう思うと、彼女達の心にも無い、口先だけの言葉が可笑しくて、笑い出してしまった。

弘美の周りが、何が可笑しいのかと顔を見合わせる。

「何が可笑しいのよ。」

一人が弘美に聞いたのだした。

弘美は、鏡を仕舞うと、立ち上がり彼女達を見据えた。
そして、

「あんた達の誰が、私以上に綺麗だというの？」

周囲が息を呑むのが分かる。

「私だから、モデルになれるのよ！私に出来ても、あんた達に出来

るわけ無いでしょ！

私とあんた達とじゃ、月とスッポンなのよ。」
そういうと、講堂から出て行った。

外の風は冷たく、弘美の心を閉ざした。

人の愚かさ。

口では、いい事ばかり言いながらも、内心は見下げているのだ。

自分は、かつて彼女達に、あのように思われていたのかと、再認識したのだった。

それは、寂しさと哀しさを伴ったが、すぐに振り払う事のできる感情だった。

（私は、美しいのよ！あの人達とは違う！）

今まで、どれほど見下げられてきたのだろう。
知らなかった。

鏡を手にする。

知らなくても良かった事だ。

知らなければ、今まで通りの友達でいられたのかもしれない。

しかし、知ってしまったら、全てが崩れていく。

ケイタイが鳴る。

新着メールが届いている。

開けてみると、勇からだった。

毎日のように、メールが来る。

忙しくて、相手をしている暇が無い。

その為、ずっと無視してきたのだが、今の弘美は誰かと一緒に居たいという想いがあった。

『今、どこ？』

単純な内容。

『大学、会える?』

すぐに返信が返って来た。

『いいよ。』

近くのコーヒーショップで待つ事にした。

間もなく、勇はやってきた。

「今日はバイトは?」

来るなり勇が聞いてくる。

店員が、水を持ってきた。

「コーヒー!」

コーヒーショップで只、コーヒーと言われても、店員も困るだろう。

そういうと、悪びれる事も無く、頭をかきながら、

「じゃあ、ブルマンでいいや。」

と言う。

「モデル始めたんだって?」

最初に会った時も唐突だった男。

今も、話に前段が無い。

しかし、今日はその唐突さが心地良かった。

「そうね、まだレッスンの段階だけど。」

「へえ、レッスンがあるんだ。」

ちよっと、ビックリしているようだ。

そりゃあ、そうだろう。弘美自身考えても居なかった展開なのだから。

「そうか、どこ行く?」

(え? この人は、私に話を振っておきながら、興味が無いのかしら……)

多少失礼だと思ったが、敢えて文句をつけることは止めた。
今は、そんな事はどうでも良かったのだ。

結局、午後からはレッスンがあるからと、コーヒーショップでしばらく話したただけだった。

その間、何度も鏡を握り締めた。

（この人の本音は？ どうせ、私の美しさだけが必要なんだろうな。）

（私だって、アクセサリーとして、キープしてるだけだし。）

（お互い様よ。）

（でも……）

知りたい、しかし知ってしまったら、今のこの時間が消えてしまう。
そんな気がして、弘美は鏡を出さずに分かれた。

第九話（後書き）

お読み頂きありがとうございます。感想をいただけると、励みになりますので、よろしく願います。では、又お会いいたしましょう。。。。

第十話

レッスンに行くと、金木陽子が待っていた。

「おはようございます。」

弘美は、明るい声で挨拶をした。

業界の挨拶もコンビ二の時と同じなので、難なくクリアーだ。

「おはよう、どう調子は？」

「お陰様で、毎日が生きてるって感じがします。」

「そう、それは良かったわ。レッスンがきつくて、止めたくなっただか心配だったけど。」

陽子の言葉が本心でない事は、顔を見れば分かる。

「先生からも、貴方は筋がいいと報告を受けてるわ。」

「ありがとうございます。」

「さっきも先生と話していたんだけど、どうかしら、少し仕事をしてみない？」

弘美は、喜んで見せた。

ずっと、待っていた言葉だ。

どれほど嬉しいかを陽子に伝えたかったが、そこまでするのは自分には合わないと思判断し、言葉を飲み込んだ。

一体、どんな仕事なのか、弘美の脳裏にドレスを着てステージを歩く自分が浮かぶ。

しかし、陽子の口から出たのは、弘美を落胆させるものだった。

「写真の撮影会よ。」

思わず、顔が曇る。

それを、陽子は見逃さなかった。

「小さなアマチュア撮影会だけど、そういう小さなものをこなしていけないとね。最初から、トップモデルなんて無いのよ。」

自分の本心を見透かされていた事が、恥ずかしかった。

結局、2日後の朝9時には現地入りするという事で、話が終わった。

落胆はしたものの、バイト代は手に入る。

弘美は、この仕事を成功させて次へ繋げる決心をしたのだった。

レッスンを終え、外に出ると、もう外は暗く、冬がそこまで来ていることが感じられた。

2日間。

その2日間が待ち遠しい。

アパートに帰りつくと、勇が待っていた。

「どうしたの？」

「俺って何だろうってさあ」

酔っているようだ。

「酔ってるの？」

分かっていながら、口から出る、なじる様な言葉。

「酔ってるよお。お前と分かれてから、何かさあ、俺ってお前と付き合ってるのかなあって。」

そつえば、今日の午前中に勇と会ったのだった。

思い出した。

余りにも、レッスンでの出来事が嬉しくて、午前中の事など、どうでもよい事に思われ、忘れていたのだ。

「何で、今日は会えるって聞いてきたのかなあ？」

ドアの前で、グダグダと言ひ募る。

誰が見ているか分からないのだ、弘美は隣の住人が現れるのではないかと、落ち着かない。

かといって、部屋に入れるわけには行かない。

「何が言いたいの？」

つい、言葉に剣が出る。

「冷たいねえ。本当に、お前って女は冷たいよ。」

「.....」

冷たいわけじゃない、あんた達とは世界が違うだけだ、そう言って

やりたかった。

が、言ったところで酔っ払いには効き目が無い。

逆ギレされても怖いので、弘美は何も言わなかった。

「俺は、お前が好きだから、付き合ってくれって言ったのに、お前は了解したじゃないか。」

「そうね。」

「それなのに、どうして、そう、冷たく出来ちゃうわけかなあ？」

元々軽薄な男だとは思っていた。

しかし、これほどだとは思わなかった。

弘美は嫌気が差し出していた。

せつかくの夜を、こんなくだらない奴に邪魔されなくなかった。

「寒いから、帰って。」

「おお、寒いよ。この寒さの中、俺は待ってたんだよなあ。それなのに、彼氏が寒い思いをして待ってたのに、帰れってかあ？」

「待ってたのは、あんたの勝手よ！」

「俺は、お前の彼氏だよ。恋人じゃないかあ。」

勇の手が、弘美を掴もうとする。

その手を払いのけた。

「恋人ですって?!」

勇を睨みつける。

その顔が、抛り美しく見える。

「冗談じゃないわ！私とあんたとは住む世界が違うのよ！私はモデルよ。それも、トップモデルになるのよ！あんたみたいに、飲まなけりゃ女の所に来れない様な、情けない男が恋人であってはならないのよ！」

勇の顔色が変わる。

しかし、一度火がついた弘美を止める事は出来ない。

このまま黙って見過ごせば、弘美のプライドが崩れるのだ。

自分はトップモデルなのだから。

「今日は暇だったから、会ってあげただけよ。あんたがあんまりう

るさいから。」

勇の手が飛んだ。

鋭い音が暗闇に響いた。

弘美は何が起こったのか分からなかった。

しばらくすると、左の頬が熱を帯びてきた。

怖かった。

これ以上乱暴をされたら、せつかくの仕事にも差し障りが出る。

今でさえ、2日後には仕事が決まっていると言うのに、頬を叩かれてしまったのだ。

早く冷やさなければ。

弘美は、もう何も言わなかった。

勇は、「お前が悪いんだよ」と可笑しな笑いを残して消えて行った。悔しさと、頬の熱さが弘美を襲った。

バックから鍵を出し、震える手で鍵穴に差し込む。

涙がこぼれた。

（私が何をしたと言うの！）

（私はモデルになる為に頑張っているだけなのに！）

（2日後には、初の仕事があるのに、どうしてこんな事になるのよ！）

ドアを開け、台所でタオルを濡らす。

涙が止まらない。

頬を冷やし、座り込んでしまう。

寒い部屋の中で、弘美は泣き続けた。

ポケットから落ちた、コンパクトの蓋が開き、鏡が……

笑っていた。

第十話（後書き）

お読み頂きありがとうございました。感想をいただけると励みになりますので、よろしくお願いします。では、続きをお楽しみに。

第十一話

2日後。

鏡を覗くと、頬の腫れは無かった。

一時はどうなるかと心配したが、冷やし続けた甲斐があったのだらう。

化粧の乗りも良い。

弘美は、その朝の自分に満足だった。

9時には現地入りという事なので、余裕を持って家を出た。

急いで、途中何かに巻き込まれる事があれば、間に合わなくなってしまう。

それに、急いでいる姿は、自分には似合わないのだ。

自分は、いつでも美しく優雅でなければならない、そう思い込んでいるのだ。

現地の公園に着くと、バスから金木陽子が下りて来た。

「おはようございます。」

「おはよう。20分前に到着ね。偉いわ！」

（良かった、早く出て正解ね。）

弘美は金木陽子がいるであろう事までは、考えていなかったのだ。

「今日は、アマチュアカメラマンが来るわ。その人たちの前でポーズを取ってくればいいのよ。時間は1時間。風景の良さそうな所を選んで、撮影をするから、貴方はバスの中で準備をして頂戴。」
そういうと、スタッフと共に消えて行った。

言われるままに、バスに乗ると、そこにはいろいろな衣装が揃えられ、化粧道具もあった。

「おはよう、私は貴方のメイキャップを担当する野上よ、よろしく。」

「よろしくお願いします。」

「じゃあ、こっちに来て。」

バスの奥へと迎え入れられる。

椅子に座ると、今日の為の衣装が出された。

ミニスカートで胸が開いている。

ノースリーブなので、この真冬には厳しい格好だ。

弘美の浮かない顔を見て、野上は笑った。

「大丈夫よ、この上にコートを着るから。」

と、毛皮のコートを見せた。

「でも、コートの前をしつかり閉めて撮影会に臨んだらだめだけだね。それ相応に、開けたりしながら、やってるうちに寒さも忘れるって言うしね。」

「はい。」

さすがに、これだけ寒い中でコート無しはきつい。

しかし、これがモデルの仕事であるならば、致し方ない。

「今日は、暖くなるって話だけど。風が冷たいよね。」

弘美のメイキャップをしながら、野上が言う。

顔をいじられているのだから、返事の仕様が無い。

9時半を回ると、外が騒がしくなってきた。

「ああ、来た来た。」

「誰がですか？」

「カメラ小僧よ。」

野上が面白そうに、バスの窓から外を覗く。

皆、似たような格好をしている。

カメラを数台ぶら下げている人もいる。

「あの人たちはね、ああやって月に1回、うちがやるこの撮影会に来るの。」

「そうなんですか。」

「こういうところでしか、美人を写せないでしょ。」

「そう・・・ですね。」

「街中で、勝手にシャッター切ったら、怒られちゃうじゃない。」

悪戯そうに、野上が笑う。

「それに、ポーズはとってくれないものね。」
確かにそうだ。

自分だって、街中でシャッターを切られたら、腹が立つ。

まして、ポーズをとるなんて事はない。

「貴方は綺麗だから、あの人たちも喜ぶわよ。」

何だか不思議な感じがした。

彼らを喜ばせるために、自分はポーズをとらねばならないのか？
では、自分は一体何なのだろうか？

時間が来た。

バスに金木陽子が乗り込んできた。

「準備はいい？」

野上の背筋が伸びる。

「はい！大丈夫です！」

陽子が、弘美を頭の前からつま先まで、舐めるように見て、ニッコリ笑った。

「いいわ。これだけ綺麗なら、上出来ね。さあ、始まるわよ。」

陽子に連れられて、バスから下り、カメラ小僧の待つ池の前に行く。
すると、口々に感嘆の声が上がる。

陽子が告げる。

「皆様、お待たせいたしました。本日のモデルさんの、弘美です。
よろしく願います。」

口笛が鳴る。

「今日の子は最高だねえ。」
と言う者が居る。

「早く始めよう」
とせかす者が居る。

音楽が鳴り出し、それに合わせて、ポーズを取り出す。
風が冷たい。

長い髪が踊る。

しかし、寒さを感じていたのは、最初のうちだけだった。

次第に、弘美自身の気分が高揚し、寒さを感じなくなっていった。

カメラ小僧の後ろの方で、陽子とスタッフが満足そうに話している姿が眼に入った。

（これがステージへの第一歩よ！）

カメラを切る音が、弘美を夢の世界へといざなっていった。

第十一話（後書き）

お読み頂きありがとうございます。感想をいただけると励みになりますので、よろしくお願いします。では、続きでお会いしましょう。

第十二話

あっという間に、撮影会が終了した。

誰もが口々に、「今日は最高の撮影会だった」と言っていた。

そして、誰もが喜びの表情で

「又、弘美ちゃんにモデルになって欲しい」

と告げて、会場を後にした。

バスに戻ると、バスの暖かさが身にしみる。

体中が冷え切っていた事を、思い知らされた。

指先が冷えの為に痺れている。

温かい物をと、野上がコーヒーマグを淹れてくれた。

そのコップを手にした時、弘美は自分の手に目が留まった。

それは、今まで気にした事の無い、黒い斑点だった。

（ホクロ？　こんなのあったかしら？）

更に、寒さのせいか、手ががさがさする。

まるで、一挙に歳をとったような油の無い手だ。

（寒風で乾燥したのね。）

弘美は、野上に手のクリームをもらいつけてみた。

何度つけても、かさは直らない。

しっとりした感触が戻ってこないのだ。

（よっぽど、寒かったんだ。参ったなあ。）

小さくため息をつく。

野上が、弘美の表情から察してくれたのか

「お風呂に入って、クリームを塗って、薄手の手袋をして寝てごらん。寒さで乾燥したのなんか、すぐに直るから。」

「そうですね……。」

多少、気にはなったが、言われた通りにするより他、方法が見当たらなかった。

（今夜は、よくマッサージして寝よう。）

（モデルの手がこんなじゃ、夢も希望もなくなるわ。）

アパートに帰り、言われたとおり入浴後、クリームを念入りに塗りこみ、手袋をはめた。

そして、鏡に自分を映す。

勿論、化粧水や乳液をたっぷりと吸収させる為だ。

顔全体に、油分を与え、寒風で疲れた肌に栄養を与えねばならない。

弘美は、鏡の中の自分に集中した。

一生懸命、抛り美しくなるために時間を掛けた。

鏡は、そんな弘美を映す事を心から喜んでいるように感じた。

顔の手入れをしていると、あつという間に時間が過ぎていく。

気が付けば、１１時に程近くなっていた。

弘美は、鏡に向かって

「もう、寝るわね。」

と呟いた。

鏡を閉じ、ベットへ向かう。

いつもと同じ、夜。

いつもと同じ、時間。

ただ、弘美が気が付いていない事が一つだけあった。

それは、誰も気が付かないような小さな、変化だった。

第十二話（後書き）

お読み頂きありがとうございました。感想を書いていただけると嬉しいです。では、続きでお会いしましょう。

第十三話

季節は、冬を迎えていた。

あの日を境に、モデルの仕事も少しずつ入ってくるようになった。仕事の内容は、相変わらず、カメラ小僧のモデルだったり、広告のモデルだったり、パツとしない内容だが、それでも着実に夢に近づいているのだと、弘美は確信を抱いていた。

毎日、パツクをしたり、ジョギングをしたりと時間はあつという間に過ぎていく。

どれほどの努力をしても、それが美に繋がると思ったら、決して苦しいとは思わなかった。

大学構内でも、弘美は有名になっていた。

特に男子学生の間では、マドンナの様に、誰もが弘美に目を向けていた。

弘美に近づき、声を掛け、少しでも時間を共有しようとする者が後を絶たなかった。

しかし、鏡に映った彼らの声を聞けば、全てが色あせてしまう。

鏡は、いつも事実を教えてくれた。

それが、憎しみの事実であれ、羨望の事実であれ、鏡は全てを弘美に伝えた。

そして、友達だと思っていた彼女達の本心も、包み隠さず伝えるのだ。

久しぶりに講義を受けようと、教室へ入ると、彼女達の冷たい視線が弘美に向けられた。

それが、どんな意味を示しているのかは、鏡が無くても分かる程だ。しかし、弘美は、誰が何を考えているか知りたくて、机に鏡を置いた。

すると、彼女達の心の声が聞こえてきた。

《モデルだからって、たかが広告に出てるだけじゃない。》

《ただだけお高く留まってるのよ。》

《自分が世界で、一番綺麗だと思ってるんろうけど、今にしっぺ返しに来るわ。》

誰もが、心の奥底で、弘美を誹謗中傷している。

けれど、弘美は逆に楽しくなった。

それは、弘美の美しさを妬んでの事だ。

つまりは、自分の美しさを誰もが認めているという事に繋がる。

弘美は、可笑しくてたまらなかった。

彼女達に、この可笑しさを教えてやりたい気持ちが湧いてきていた。そんな時、一人の声が、弘美の脳に響いた。

《大丈夫かな。》

誰？

誰の声なのか、分からない。

《あんなに、老けてしまつて・・・病氣なんじゃないかしら。》
本当に心配しているような、感覚が伝わってくる。

しかし、弘美はそれが誰の声であるかよりも、《老けてしまつて》という言葉に引かれた。

（老けてる？ 私が？ 冗談じゃないわ！）

（これほど美しい私が、年寄りに見えるというの？）

（どこのバカよ！）

周囲を見回すが、その声の主が誰なのか分からない。

弘美は、イライラと髪を掻き揚げた。

幾本もの髪の毛が、抜けて指に残った。

《髪の毛が薄くなったみたい・・・気のせいかしら》
ぞつとした。

最近、確かに抜け毛が気になってはいたが、季節の変わり目という事もあるだろうと、無理に意識しないようにしていたのだ。
今まで誰も、こんな事を言わなかったのに。

いや、本心でも思っている人はいなかった。

誰も気が付いていない事を、一体誰が！

鏡の中に写る人物を見るが、それが誰の声なのかは、見当が付かない。

悔しさと、焦りが顔を出す。

（髪が長いから、ボリューム感も落ちるのかも知れない。）

（何とかして、抜け毛をおさえて、ボリューム感を取り戻さなければ。）

シャンプーに問題があるのか、トリートメントを変えてみようかと、その日の講義は、結局何も耳に入らぬまま終了した。

講義が終わる頃には、へとへとに疲れていた。

手に出来たホクロも気になる。

しかし、一つだったホクロが2、3個増えたところで、大した問題ではない。

それよりも、手に年齢を感じる時がある。

それは、母の手に似ているのだった。

いくら、クリームを塗りこんでも、マッサージをしても、母の手と同じ様に老化を感じる。

勿論、毎日ではなく、それは時々やってくる。

どうしてなのか、弘美には分からない。

疲れからなのか。

寒さのためなのか。

そんな時は、手袋を欠かさず付け、誰の目にもさらさないように努めた。

どれほどの不安を抱えていても、笑顔を絶やす事はなく、りと背筋を伸ばし、モデルとしての気品と、気高さを保ってきたのだ。

研究室に顔を出そうかと思っていたが、こんなに疲れていたのでは、表情に出してしまうかもしれない。弘美は、研究室とは反対の方向へと歩き出した。

足がもつれる。

こんなに体力が落ちているはずは無いのに、歩こうと思っても足が出ない。

（一体、どうしたのよ！）

その場に、座り込んでしまった。

脳裏に蘇る声。

《あんなに、老けてしまつて・・・病気なんじゃないかしら。》
弘美は、頭を強く振った。

（そんなはず無い！）

（昨日だって、ちゃんと仕事をこなしたのよ。）

（大丈夫。あの人達のせいよ。）

（あの人達のろくでもない、思考のせいよ！）

しばらくすると、落ち着き、いつもの元気が戻ってきた。

弘美は、立ち上がると歩き出した。

とにかく、キャンパスから離れて、弘美を感嘆の眼差しで見てくれる人達の元へ。

第十三話（後書き）

お読み頂きありがとうございました。では、続きでお会いしましょう。。。

第十四話

弘美は、駅前へと足を進めた。

そこは、多くの人が行きかう場所だ。

その雑踏の中に身を投じる。

誰もが、弘美を振り返る。

おもむろに、鏡を取り出し、鏡に人を写した。

弘美の脳に、多くの声が木霊する。

《綺麗な子だな。》

《モデルさん？》

《美人だ！》

その声が、弘美のエネルギーとなる。

だが、弘美はここでも、あの言葉に出くわしたのだ。

《髪、薄いなあ。》

《モデルみたいだけど、まさかね。あの髪じゃね。》

体中から、怖気が振るう。

鏡を閉め、逃げるようにその場から立ち去った。

誰も居ない所へ。

誰の声も聞こえない所へ。

路地へ逃げ込み、小さく蹲る。

暗い穴へ落ちていくような感覚に捕らわれながらも、弘美は冷静さを取り戻そうと必死だった。

（どうして？みんな綺麗だって言うのに。）

（どうして、一人だけの声が強調されて、聞こえてくるんだろう。）

（きつと、今は幻聴よ。）

（私は、綺麗なんだから。）

（大丈夫よ！）

鏡を開き、笑顔を作る。

鏡も笑顔を返してくる。

「大丈夫よね。」

「私は、綺麗よね。」

『ええ、貴方はとってもき・れ・い』

鏡が答える。

「私の髪、薄くなんかいいわよね。」

『ええ、大丈夫よ。とっても綺麗な髪よ。』

いつの頃からか、弘美は鏡と会話するようになっていた。

そして、それが何よりの自信に繋がる。

弘美は鏡をしまつと、立ち上がった。

その時には、もう恐怖心は無くなり、いつもの弘美に戻っていたのだ。

瞬く間に、日が過ぎていく。

仕事も順調だ。金木陽子も喜んでくれている。

季節も変わり、鏡とであつた頃がやってきた。

アジサイが咲き乱れる、あの季節。

未だに、髪を梳くと抜け毛が気になる。

それでも、短く切った髪にパーマを当て、ボリュームを出したために、見た目には何も変わらない。

それどころか、モデルの仕事では、評判が良かった。

誰もが、より綺麗になったと絶賛した。

鏡も、喜んでくれた。

あの日以来、人込みであの声は聞こえてこない。
誰もが美しいと褒め、綺麗だと感嘆してくれる。

（あの時は、疲れていたのかもしれないわ。）

（そうじゃなくちゃ、可笑しいもの。）

しかし、毎朝のブラッシングで抜ける髪は、季節が変わっても変わらず、気にならないわけではなかったのだ。

（この若さで、剥げるなんてあるわけ無いしね。）

永遠の美。

弘美の望みは、誰も真似の出来ない、絶対の美しさだ。
しかし・・・

アジサイの花は、七色に変化し、茶色に変わる。

アジサイ自身は、色を変え始めている事に、気が付いていない。
今を美しく、永遠の美がそこにあると、信じて咲き続けるのだ。

第十四話（後書き）

いよいよ次回は最終章となります。お楽しみに・・・

最終章

雨が続けていた。

ここ10日程、仕事の電話が無かった。

（そろそろ、バイトしないと、生活ヤバイよ。）

弘美は、ケイタイを眺めた。

美しいと、持て囃され、仕事も次々に入っていたので、今では研究室のバイトも止めてしまった。

お金に不自由を感じなくなっていた。

もっと、有名になってステージに立てれば、きっと豪華なマンションに引越しが出来ると、毎日のように想像を楽しんでいた。

その為、貯金をしなければならぬと思っただけでも、次のバイトが入れば、お金も入るので、つい買い物三昧になってしまう。

以前には、考えられないような、化粧品の数々。

洋服や、バック、靴が所狭しと置かれている。

それらも、一度使っては、飽きてしまい、そのままになっている。

学生にしては、裕福な生活なのだろう。

かつての貧乏生活の頃は、部屋が散らかっている事など無かった。

それが、今では、片付ける事よりも、自分を磨く事に集中して、部屋は見ても無残な状態となってしまう。

しかし、弘美はその状態を気にする事が無い。

片付けるという行為が、今の弘美には不要な行為なのだ。

冷めたコーヒーを口にしながら、アートされた爪を眺める。

雨で湿気を持った髪に手をやる。

やはり、気になる。

TVは、雨の中の街を写していた。

（この雨じゃ、どこにも行けないわね。）

（仕事もないし。どうしよう。）

（大学……行かないと、単位落ちるだろうなあ。）

留年は避けたかった。

モデルの仕事をするにしても、大学は卒業するように、金木陽子からしつこく言われていたのだ。

初志貫徹。

それが、金木陽子の信念だった。

陽子は、弘美と会ったたびに、同じ話をして聞かせた。

『初志貫徹だよ。自分からやろうと思った事は、最後までやりなさい。それが出来ないようじゃ、モデルになっても成功しないわよ。』

弘美は、真面目な顔で聞きながらも、心の中では

（別に、初志貫徹しなかったって、私ほどの美貌があればいいじゃない。）

と笑っていたのだ。

「それにしても、雨だ〜」

声に出して言ったところで、雨が止むわけではない。

「電話してみようかな。」

ケイタイを手に取り、モデルクラブの番号を選ぶ。

コール音がする。

受話器の上がる音がし、聞き慣れた女性の声がした。

「弘美です。」

「あ・・・あら、弘美さん。」

戸惑ったような、相手の声が聞こえた。

（どうしたんだろう？）

空いてる手が鏡へと伸びるが、さすがに電話の相手の心までは読めない。

「何か、御用？」

（用があるから、掛けたんじゃない！）

「金木さん、いますか？」

「ええ・・・と、外出してるわよ。」

「最近、仕事の依頼が無いから。何か仕事入ってないですか？」

「仕事？・・・仕事が入ったら電話するわ。じゃ、忙しいか

ら切るわね。」

ガチャリと電話が切れた。

弘美は、嫌な気分に取り付かれた。

（何だか、掛けたら悪かったのかなあ）

ケイタイを眺めながら、どうしようかと思案していたが、結局大学へ行く事に決めたのだった。

一方、金木陽子は電話の傍に居た。

「誰から？」

「弘美さんです。」

「そう・・・」

「いいんですか？」

「何が？」

陽子の口調が険しくなる。

「いえ、あの・・・」

「しょうがないでしょ。あれじゃあ、使えないわよ。分からないのかしらね、あの子も。」

陽子は、部屋を出てると、新人モデルに声を掛けた。

「綺麗ね。いいわよ。きつと、最高のモデルになれるわ！」

新人が笑顔で嬉しそうに頷いた。

弘美の赤い傘が、構内へ入る。

雨に濡れたコートを脱ぎ、教室へ向かう。

誰も、弘美に声を掛ける人はいなかった。

誰もが遠巻きに、弘美を見た。

そして、囁き笑う。

（嫌な人達ね！どうせ、私の美しさが羨ましいんでしょ！）

弘美は、堂々と胸を張り教室のドアに近づいた。

その時、背後から声がした。

「弘美さん？」

振り返ると、いつも教室の中で一人で座っている女性徒だった。

相手は、弘美の名前を知っているが、弘美には相手の名前が分からないのだ。

それもそのはずで、弘美は暗く静かで壁同様の彼女が好きではなかった。

美のかけらも無い彼女の存在が、疎ましかったのだ。

美しくない者が、自分の周りに居る必要は無い。

弘美は、眉を寄せた。

「誰？」

「あ、名前覚えてないのね。正子。飯田正子。」

（顔も平凡なら、名前も平凡ね。）

正子を見下す、弘美の視線。

しかし、正子は構わずに続けた。

「知ってるわ。貴方が、私を見下してる事。でもね、今の貴方は怖くないから。」

聞き捨てなら無い言葉だった。

何が怖くないと言うのか？

そして、今までは何が怖かったのか？

「だって、今までは近寄りがたいほど、綺麗だったけど。」

「今は綺麗じゃないとでも言うの！」

綺麗だった、という過去形。

許せなかった。

「どういう意味かしらね？」

憎しみが表出する。

「知ってる？」

正子は楽しそうに続けた。

「もうすぐ、アジサイは茶色になるのよ。まるで、腐ったように。」

「何が言いたいのか！」

正子はクスクスと笑いながら、教室へ入っていった。

周囲も笑っている。

誰もが、弘美を見て笑っていた。

急いで鏡を開き、顔を見た。

そこにあるのは、いつもの美しい弘美の顔だった。

自分を確認すると、急に周囲に対する怒りが込み上げてきた。

平凡な人間は、美しいものを見ると、妬みたくなる。

きっと、久しぶりに会った自分が、更に美しくなっているので、周

囲は嫌味を言いたくなったのだろう。愚かな、可哀想な人達だ。

しかし、弘美はその状況が溜まらなく嫌だった。

不愉快だった。

そして、ここは自分の居る場所ではないと思った弘美は、踵を返すと構内から出て行った。

（大学なんて、止めたって構わない！）

（私は、トップモデルになるんだから、大学に行かなくなたっていいじゃない！）

（そうよ、あんな嫌な人達と一緒にいる必要なんてないわ！）

弘美は悔しくてたまらなかったのだ。

しかし、その悔しさがどうしてなのか、分からなかった。

悔しさと寂しさの、入り混じったような、妙な感覚だった。

他人が、自分の美しさを妬み、己の平凡さに悔しさを感じる事はあっても、自分が悔しさなど覚えるはずは無い。

美しい自分が、寂しさなどあるうはずがないのだ。

それが弘美の想いだ。

赤い傘を差しながら、颯爽と歩く。

水しぶきが、足元を濡らす。

それが余計に、弘美をイラつかせた。

ウィンドウにアクセサリーが飾られている。

新作のバックと共に、弘美の目が吸い寄せられる。

（次のバイトで、これを買おうかな。）

（私にこそ、似合いそうじゃない！）

（でも、今はだめね。お金が無いって、つまらないわね。）

その場から、一步退くと、ウインドウに弘美が写った。

赤い傘を差し、赤いレインコートの弘美。

髪は薄く、顔は黒ずみ、あちこちにシミがある。

皮膚はたるみ、しわが目立つ。

まるで老婆だった。

弘美は、小さな悲鳴を上げた。

（錯覚よ。そんなはずは無いわ。）

震える手で、コンパクトを取り出す。

（私は綺麗なのよ！綺麗なのよ！）

どうして、こんな老婆がウインドウに写っているのか、理解が出来ない。

鏡に映る自分は、常に美しく、近寄りがたい程の光を放っていたではないか。

傘が手から抜け、道に転がる。

雨が、全てを隠すように降り続けている。

弘美は、鏡に我が身を写した。

そこに写る弘美は、いつも通り、輝きを放っていた。

しかし、鏡の中の弘美は、一滴の雨にも濡れていないのだ。

「……どうして？……私は、こんなに濡れているのに。」

『貴方は、綺麗よ。』

ウインドウを見る。

そこには、赤いコートの、髪も薄くなった老婆が居るだけだ。

「そんなはず……ない。どういう事？一体、何？」

『何が不満だって言うの？貴方は誰よりも綺麗なのに。』

「そうじゃない……ちがう！どうして、鏡の中の私は濡れてないのよ！」

雨の音で、全ての音が消えてなくなる。

『貴方は……とっても……きれいよ。』

弘美が崩れる様に、その場に座り込んだ。

雨が容赦なく、弘美に降り注ぐ。

どこで狂ってしまったのか。

どうして、こんな姿になったのか。

「これは、夢。これは、きつと夢よ。悪夢よ……。」
震える声。

鏡が、呆然とした弘美の手から転がり、道に落ちた。

その鏡が写しているのは、いつまでも美しい弘美だった。

「これは……悪夢よ……早く、目を覚まさなくちゃ……。」

頭の中に霧が立ち込める。

鏡が嬉しそうに笑った。

アジサイの色が変わった……。

【 完 】

最終章（後書き）

最後までお付き合い頂きありがとうございました。いかがでしたでしょうか？感想をいただけると嬉しいです。

では、次回作でお会いしましょう。。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8396k/>

鏡

2011年6月5日20時57分発行